

文化の発展のために ——大原孫三郎——

岡山県倉敷市は、白壁が美しい文化の香り高い街です。その代表的な存在となっているのは、年中、大勢の人がおとずれ、今では、世界中の人々から愛されている大原美術館です。

この大原美術館をつくった大原孫三郎は、明治十三年七月、今の倉敷市で生まれました。孫三郎の家は、当時、県内いたるところに田地をもつ大地主であり、また、紡績会社を経営している資産家でした。

孫三郎は二十三才になった年の五月二十三日の日記に、「わたしの財産は、天から貸しあたえられたものであり、これを人々のために使うのが自分の天職である。」と書いていますが、自分が受けついだ財産を世の中のために利用すべきだ、という信念を一生つらぬいたのです。

大正十年三月、倉敷市の小学校の校舎で、洋画の名画展が開かれました。郷土の画家、児島虎次郎がヨーロッパから持ち帰った、二十五枚の絵が展示されたのです。孫三郎は、遠く東京や九州から、多くの人々が集まって来るのを見ておどろきました。絵を見ている人々が、目をかがやかせてくいい入るようにつめ、いつまでもその場を動こうとしないのには、もっとおどろきました。孫三郎自身も、見ているうちに洋画の魅力にとりつかれ、絵に引きつけられてしまいました。



大原孫三郎 大原美術館提供



（このようにすばらしい洋画を、日本ではほとんど見る事ができないとはいかにも残念なことだ……。ようし、わたしが、日本で最初の洋画の美術館をつくろう。）

と、孫三郎は決心しました。さっそく、虎次郎に自宅へ来てもらいました。

「虎次郎さん、西洋の名画を集めることはできないでしょうか。」

「わたしも、前々から望んでいたことです。しかし、名画を集めるとなると、莫大なお金がかかります。」

「費用はわたしにまかせてください。いくら高くてもいいからあなたの力で、良い絵を買い集めてもらえないでしょうか。」

虎次郎は思いがけない言葉に、しばらく声も出ませんでした。

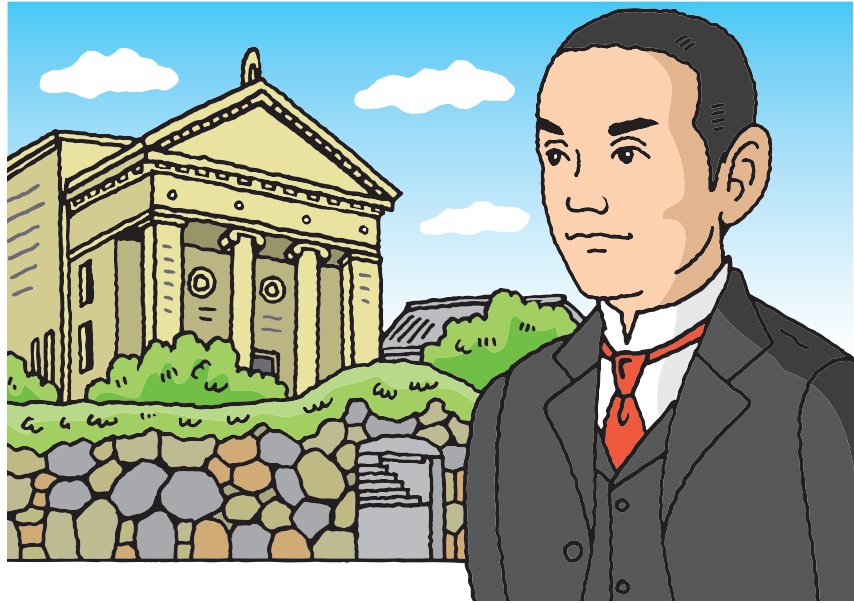
「できるかぎり力をつくして、名画を集めましょう。」

足どりも軽く立ち去る虎次郎の後ろすがたを見送ってから、孫三郎は、

（ヨーロッパに行って直接名画を見て勉強するということは、簡単にはできることではない。最高の名画を集めて、いつでも、だれでも見られるように美術館をつくっておけば、自然と国民の教育に役立つだろう。そして、倉敷を文化の中心地にしたい。）

と考えながら、開け放された障子の間から見える外の景色をながめていました。春の陽光があふれるように庭の木々にふりそそいでいました。

名画が、一枚、一枚、買い集められ、グレコ、ミレー、セザンヌなどの絵もとどきました。そのたびに孫三郎の財産は、どんどん、少なくなっていきました。孫三郎は着物一枚買うのも、大好きな肉を食べるのもがまんして、おどろくほど質素な暮らしをしました。



しかし、世間の人々の中には、悪口を言う人も少なくありませんでした。

「大原のだんなさんは、とてつもない大金を出して、西洋の絵を集めているような。金持ちの道楽じゃよ。」

「どぶにお金をすてるようなものだ。絵なんか買わないで、もっと役立つことに使えばいいのに。」

こんなかげ口が、絶えず孫三郎の耳にも入ってくるのでした。ときには、孫三郎の心も動揺することがありましたが、昭和五年十一月五日、ついに、念願の美術館が建てられました。

しかし、開館当時は、一日に平均二人か三人が来るだけでした。天候の悪い日などは、入館者が一人もいない、という日さえあったのです。

ひっそりとした美術館の入口には、ロダンの彫刻「カレーの市民」が、きっと口を結び、強い決意をおねにひめて、歩み出そうとするかのように、雄々しく立っていました。

孫三郎は、その前にひとりたたずんでいろいろと考えたものでしたが、人々のために役立ちたいと思う心と、文化の向上は人々のくらしをゆたかにするという信念は少しも変わらず、引き続いて多くの名画を集めました。

そうして、今日の^{こんにち}ような「世界の^{よこ}たから」といわれる^{びじゅつかん}美術館^{びじゅつかん}になったのです。

孫三郎^{まごさぶろう}は大原美術館^{おほはらびじゅつかん}のほかに、大原農業研究所^{おほはらなりやうけんしゆ}、大原社会問題研究所^{おほはらしやかいもんだいけんしゆ}、倉敷労働科学研究所^{くらしきろうどくがくけんしゆ}など、数多くの業績^{ぎよく}を残して、昭和十八年一月、六十四才で、多くの人におしまれながらなくなりました。財産^{ざいさん}として残っているものはほとんどなく、その大部分が社会事業に使われていました。

※児島虎次郎^{こじまとらじろう}：岡山県高梁市出身の画家^{たかはし}。孫三郎とは生涯^{しょうがいのしんこう}親交^{しんこう}をもち、大原美術館の建設^{けんせつ}に大きく貢献^{こうけん}した。



大原美術館 提供

1 関連的な道徳の学習のテーマ 郷土を愛する心

2 関連的な道徳の学習のねらい

道徳科を要として、総合的な学習の時間「郷土の宝を見付けよう」や日々の暮らしの中での「郷土の宝を守ろう」の取組などと関連を図りながら学習を進めることで、郷土の伝統と文化を守り大切にしようとする態度を養う。

3 構想図（9月下旬～10月上旬）

【日々の暮らし】

【道徳科】

【各教科等】

【児童の意識】

朝の会スピーチ

「地域で大切にされている場所・人・イベントなどを紹介しよう」

- ・〇〇祭り ・〇〇公園
- ・登下校見守りの〇〇さん
- ・子ども会 等

総合的な学習の時間

郷土の宝を見付けよう

「〇〇先生の話聞こう」

地域の伝統文化についての話を聞く。 支援1

「郷土の宝をさがそう」

郷土の宝（伝統的な行事や文化等）を調べ、郷土のために尽くした人々について知る。 支援2

道徳科

主題名 文化の発展に尽くす

内容項目 C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する心をもつこと

教材名 「文化の発展のために ―大原孫三郎―」

ねらい 我が国や郷土の文化の発展に貢献した人々の願いに気付き、伝統や文化をさらに発展させていこうとする心情を育てる。 支援3

「郷土の宝を守ろう」

郷土の宝をより発展させるために関わり方を工夫したり自分にできそうなことを考えたりして実行する。 支援4

「郷土新聞を作ろう」

学習して分かったこと、感じたことを振り返って、新聞にまとめ、友達や保護者、地域の人に紹介する。 支援5

・自分たちの地域の伝統や文化は、多くの人々の努力や工夫でできてきたんだな。

・郷土にはたくさんの宝があるんだな。郷土を発展させてきた人々には、どんな気持ちがあったのだろう。

・郷土の文化の発展を心から願って、郷土のために努力したんだな。自分にも何かできることがあるかな。

・郷土の行事を守ることは、郷土の発展につながっているんだな。

・郷土にあるたくさんの伝統や文化を大切にしていきたいな。

4 教師の支援

支援1－道徳的価値に対する構えに高めるために

郷土の伝統や文化、歴史に関する話を聞く機会を設ける。地域にある伝統行事や古くからある寺社などについて詳しい方を招き、話を聞くことで、身近な伝統文化について考えていこうとする構えがもてるようにする。

支援2－心を耕し、課題意識を高めるために

「郷土の宝を見付けよう。」では、郷土にはどんな宝（文化財、施設、産業、伝統文化等）があるかを調べる活動を行う。それぞれの宝がどのようにつくられ守られてきたものなのかという視点で声かけをし、郷土の発展に寄与した人々の思いに関心をもつことができるようにし、「郷土を発展させてきた人々にはどんな気持ちがあったのだろう。」という課題意識につないでいく。

支援3－それまでに抱いた気持ちを道徳科で語るために

導入では、「郷土の宝を見付けよう」で見付けた宝について話をさせ、「郷土を発展させてきた人々にはどんな気持ちがあったのだろう。」という課題意識をもてるようにする。

中心場面として、『金持ちの道楽だ。』などのかげ口を言われていたときの孫三郎の気持ち」を取り上げる。自分の財産を美術館建設のために費やすことについて、迷いや不安があった孫三郎の気持ちにも十分共感させ、それでもあきらめなかった郷土発展への強い思いを、支援2で見付けた郷土の宝と重ね合わせながら、しっかりと考えさせたい。

展開後段では、支援2で調べた郷土の伝統行事への自分の今までの関わり方を振り返り、これからの生き方につないでいけるようにする。

支援4－道徳科で捉えたことを確かにするために

道徳科で捉えた「郷土の伝統や文化を大切にし、さらに発展させたい。」という思いをもとに、支援2で自分が調べた郷土の伝統行事への関わり方を工夫する。行事に参加する、実際にその場所に行ってみるなどの方法を考えて実行する中で、伝統を受け継いできた人々の思いや願いを実感し、さらに発展させていく方法を考えるなどして、捉えた道徳的価値を確かにできるようにする。

支援5－自分の変容に気付き意欲的になるために

郷土に対する自分の思いを込めた郷土新聞をまとめることで、これまで気付いていなかった郷土の素晴らしさを感じている自分に気付くことができるようにする。友達と発表し合ったり、保護者・地域にも発信したりすることで、伝統文化について語り合う機会を増やし、自分がこの伝統を受け継いでさらに発展させるよう努めていく態度を養うようにする。

5 要となる道徳科

(1) 主題名 文化の発展に尽くす

(2) 主題設定の理由

① 内容項目について

中心とする内容項目は、C「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。」である。自分が生まれ育った郷土は、生きる上での大きな精神的な支えとなるものである。そういった郷土の伝統を継承することは、長い歴史を通じて培われ、受け継がれてきた習慣や芸術などを大切にし、それらを次代に引き継いでいくということである。過去から現在に至るまでに育まれた我が国や郷土の伝統と文化に関心をもち、それらと現在の自分との関わりを理解する中から、我が国や郷土の伝統と文化を大切に作る心は芽生えてくるのである。

② 児童の実態について

関連的な道徳の学習の中で児童は、朝の会のスピーチや総合的な学習「郷土の宝を見付けよう」などの活動を通して、郷土にはたくさんの伝統文化やそれに関わる人々が多く存在することを意識できるようになってきている。しかし、それらの「郷土の宝」に込められた人々の思いにまでは、考えが及んでいないとも言えない。そこで、そうした優れた「郷土の宝」に込められた人々の思いに気づき、自分との関わりで考え、伝統や文化を愛し、さらに発展させていこうとする気持ちを育てるようにしたい。

③ 教材について

この教材は、大原孫三郎が大原美術館を建設することを志した信念と美術館が完成して今日に至るまでの経過や苦労したことについて孫三郎の心情を中心に書いたものである。美術館の建設を決心した背景には、自分の財産を人々のために役立てたいという孫三郎の信念がある。そうした孫三郎の強い思いを自分と重ね合わせて考えられるようにすることで、我が国や郷土の発展に尽くした先人の願いに気付かせ、伝統や文化をさらに発展させていこうとする心情を育てたい。

◇ 板書例

○ 地域の文化を発展させるために自分ができること	◇ 郷土の人々の役に立ち、発展を強く願う気持ちが大切。	中心場面の絵 ・ 私の考えは間違っていたのか。 ・ 他のことにお金を使う方がよかったのか。 ・ 美術館の完成は人々のためにきつと役に立つ。	「金持ちの道楽だ。」などのかげ口を聞いた時	・ 芸術は人々の役に立つのだ。 ・ 美術館を建てたい。	展示会に集まった人々を見た時	孫三郎の写真 大原美術館の外観	文化の発展のためにー大原孫三郎ー めあて 郷土を発展させてきた人々にはどんな気持ちがあったのか考えよう。	わたしたちの郷土の宝 ・ ○○神社 ・ ○○祭り
--------------------------	-----------------------------	--	-----------------------	--------------------------------	----------------	--------------------	--	--------------------------------

◇ 参考

大原孫三郎（1880～1943年）。岡山県窪屋郡倉敷村（現在の倉敷市）生まれ。倉敷紡績（クラボウ）、中国合同銀行（中国銀行の前身）等の社長を務め、大原財閥を築き上げる。社会、文化事業にも熱心に取り組み、大原美術館以外にも、倉紡中央病院（現・倉敷中央病院）等を設立した。

(3)ねらい

郷土を発展させてきた人々の気持ちを考える中で、郷土の役に立ちたい、発展させたいという強い願いをもつことの大切さに気づき、郷土の伝統や文化を愛し、さらに発展させていこうとする心情を育てる。

(4)展開

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と児童の心の動き	指導上の留意点
1 郷土の伝統文化の発展に寄与した人物について想起し、めあてをつかむ。	○ 郷土の伝統文化を調べてみてどうだったか。 ・今まで気付かなかったことが分かった。 ・長い年月、たくさんの人が守り続けているものがあった。	・郷土の伝統文化について調べて分かったことを出し合い、「郷土を発展させてきた人々にはどんな気持ちがあったのだろう。」という課題意識をもつことができるようにする。
郷土を発展させてきた人々にはどんな気持ちがあったのか考えよう。		
2 「文化の発展のために―大原孫三郎―」を読んで話し合う。	○ 展覧会に集まった人々を見て、孫三郎はどんなことを考えたでしょう。 ・いつでも名画が見られるように、美術館をつくろう。 ・自分の財産を世の中のために使いたい。 ・西洋美術館は人々の役に立つ。 ◎ 「金持ちの道楽だ。」等の陰口を孫三郎はどんな気持ちで聞いていたのでしょうか。 ・自分のやっていることはまちがっているのだろうか。 ・もっと他のことにお金を使う方がよかっただろうか。 ・美術館の完成は、きっと役に立つからあきらめたくない。 ・文化の発展は人々の教育に役に立つ。 ・人々の役に立つことをするのが自分の役目だ。	・日本に西洋美術館がない当時の状況を説明することで、国民の教育のために美術館を建設し、倉敷を文化の中心地にしたいという孫三郎の思いを捉えさせる。 ・陰口を言われたときの孫三郎の気持ちをワークシートに書くことで、貧しい暮らしに耐える中で不安になることもあった孫三郎に共感させる。 ・それでも美術館をあきらめなかった孫三郎を支えたものは何だったのかと問いかけ、郷土への強い思いを考えられるようにし、決して信念を曲げずにやってきた孫三郎の思いが、今の大原美術館の繁栄につながっていることに気付かせる。
郷土の人々の役に立ちたい、郷土を発展させたいという強い気持ちをもつことが大切だな。		
3 郷土のことを考えた気持ちについて振り返る。	○ 今まで郷土を大切に思い、発展を願う気持ちでやってきたことがありますか。 ・地域の祭りに参加していたが、地域の発展について考えたことはなかった。 ・実際に文化施設に行って、何か役に立てることを考えたい。	・自分が調べた郷土の伝統文化を振り返り、今までの自分の郷土への思いを話し合うことで、郷土のために役立ちたいという意欲につなげる。
4 教師の話を聞く。	○ 郷土にある伝統文化を紹介します。	・郷土の伝統文化の背景にある歴史、人々の願いなどを紹介し、実践意欲を高める。
郷土の伝統や文化を大切にしたり発展させたりするために、自分にもできることを見つけて実行していきたいな。		
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ・郷土の文化の発展に貢献した人々が、郷土の役に立ち発展させたいという強い願いをもっていることに気付くことができたか。 ・郷土の伝統や文化を愛し、さらに発展させていこうとする意欲を高めることができたか。 	

文化の発展のために — 大原孫三郎 —

5年（ ）組（ ）

○「金持ちの道楽だ。」などのかげ口を、孫三郎はどんな気持ちで聞いていたのでしょうか。



A large speech bubble with a tail pointing towards the man in the illustration. The bubble contains ten vertical lines for writing.